

鎌田東二『世直しの思想』(春秋社、2016年2月刊)第五章 世直しと教育と霊性的自覚

第一節 韓国儒学の学びから

ほとんどの人が儒教を倫理道德だと理解している。ご多分にもれず、わたしもそのような一人であった。

だが、最近、「儒学は道德の学ではなく、美学である」という認識と意見を韓国で聞いて目を見開かされた。わたしは儒教についてずいぶん表面的で一般的な理解をしかしていなかったのではないかと反省させられた。

一般には儒教とか儒学言うと、古臭い硬直した封建道德だとイメージしがちだ。確かに、江戸時代に朱子学が徳川幕府の体制擁護の御用学となり近世封建制度を支え、江戸時代末期の水戸学や明治維新期の民族主義や国家主義の台頭の中で儒教的な観念や精神道德が過剰に振り撒かれたところがあるので、保守的で体制的で閉鎖的な旧弊の思想と思われる。

だが、昨年12月4日から6日までの3日間、「韓国儒学」の拠点である慶尚北道安東市の陶山ソンビ文化修道院で、嶺南退溪学研究院と陶山ソンビ文化修練院主催の韓中日国際シンポジウム「生命と平和、治癒と霊性から見た退溪学」に基調発表者として参加し、韓国儒学の伝統の奥深さや多様性に触れ、現代の諸問題や課題について学び考えることが多かった。また儒学の持つ未来可能性についてもいろいろと考えさせ、認識を新たにしました。

関心を引かれた第一の点は、韓国儒学の最高峰として仰ぎ見られ、千ウオン紙幣の肖像画にも描かれている李退溪(李滉^{イ・ファン}、1501-1570年)の提唱した儒学が「霊性」や「心」についての深い洞察に基づいて、呼吸法を含む「活人心方」という独自の身心変容技法である養生法を編み出していたことである。李退溪は、朱子の提唱した「格物致知」や「理気二元論」に基づきながら、「四端七情説」を唱え、心の構造を精緻に分析し、それをもとに道德的修養を練り上げた。「四端」は「惻隠・辞讓・羞惡・是非」の四つ知的で倫理的な心を指し、「七情」は「喜・怒・哀・懼・愛・惡・欲」の四つの感情や情念を指す。

李退溪はこうした心の知・情・意の全体構造の認識に基づいて、「養心」と「養気」を通じた「養生」のありようを示した。彼は「今の医者人は人の病を治すことはできるが、人の心を直すことはできない」「病を治めようとすればまず心を治めなさい」と「心の修養」を説いた。そして「心を治める」ことが同時に「生命を治める」ことと「道德を治める」こと連動することを指摘した。こうして「道德と養生の接点」を見出し、「心を自由にし、養うことこそが道德と生命を活かし、個人と社会を健康にする方法である」と主張したという。これはまさに韓国儒学式「身心変容技法」であるが、このような「方法」は現代を生きる多くの人に多大なヒントを与えることだろう。

興味の第二点は、基調講演者の元忠北大学学長の金泰昌博士が、「霊」を「心」と結びつけて理解するよりも、さらに一歩掘り下げて、それ「霊性」を「根源的生命力」として理解

するという観点を提示したことであった。宗教的対立が激化している一面がある現代世界の中で、「靈性」を「いのち」や「いのちの自覚」と結びつけて理解することで、対立を深めていく世界の諸宗教や諸思想との対話を重ねていく基盤づくりが可能となる。

第三点は、冒頭で触れた、韓亨祚韓国学中央研究院教授の「儒学は道德の学ではなく、美学である」という観点と主張であった。わたしは毎朝石笛や横笛や法螺貝や雅楽の龍笛を奉奏するので、儒学が人倫修養の根幹に「礼楽之道」を置いていることに関心を持っていた。『礼記』『大学』には「修身齐家治国平天下」（自分の行いを正し、家庭を整え、国を治めれば、天下を泰平に導き統治することができるようになるという儒教の根本思想）と書かれているが、ではその「修身」とはどのようにして可能かと言えば、同じ『礼記』の「楽記篇」にあるように、「楽は天地の和、礼は天地の序」であるから、天地万物の世界秩序を確かなものとするためには「楽」を奏して「天地の和」を実現しなければならない。この「楽」すなわち音楽の演奏が単なる楽器演奏に留まらない人間形成、人格修養の道であることを儒学・儒教は一貫して主張し実践し続けてきたのである。

天地人調和を調律する「礼楽」としての儒学の本質。そして韓国儒学の「養生法」。この道徳的修道と美的・芸術的修練との連携・連動に基づく「儒学は美学である」という主張こそ、未来倫理となり得る思想だと思ったのである。

第二節 『論語』と三種の学問

『論語』『為政』の「子曰、『吾十有五而志于学。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而従心所欲不踰矩』」（子曰、「吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。四十にして惑はず。五十にして天命を知る。六十にして耳順（ルビ：したが）ふ。七十にして心の欲する所に従へども矩を踰えず」）のことをよく考え、理想的な人生であると感嘆する。

十五歳にして心に誓って学問の志を立て、勉学に実践に精進努力を重ね、三十歳でひとまず基盤が固まりわが身一人として自立できるまでになり、いっそう探究と実践に励んだ。そして、四十歳になって、いろいろと迷ったりいたずらに考えすぎたりすることがなくなり、五十歳になると、それまでにうすうすとは感じてきた「天命」を明確に自覚し、この世で果たすべきおのれの使命を覚悟した。その後、六十歳になった頃には、人の言うことがそのまま素直に耳に入ってきてあるがままに理解できるようになった。そして、七十歳になって、心に思っただけで自分がこうしたいと考えることをその通り実践してもおのずと人の道を踏み外すこともなくなった。

批判の余地のない理想的な倫理的・人間的成長のように思える。常々、「靈性」とは、①根源性（根っこ）、②全体性（丸ごと）、③深化（深まり）であり、そのような様相とはたらきを持つ「いのちのコンパス」（生の方向性）であると考えているが、この「志学」（十五歳）から、「而立」（三十歳）、「不惑」（四十歳）、「知命」（五十歳）、「耳順」（六十歳）を経

て、「従心」（不踰矩・七十歳）に至る過程の標識は、人生の苦悩や葛藤や確執と靈性的自熟の相互作用や調和は生きていく上での大きな深い指針となる。

教育の問題を考える時、いつも「人類の教師たち」と呼ばれてきたソクラテスやブッダや孔子や老子やイエスのことが念頭に浮かぶが、この哲学や世界宗教の実践者・開祖とされる人々の生涯と実践と思想は、汲めども尽きせぬ泉のような珠玉の教育学的財産であると思う。

わたしは常々、「学問」的探究に次の三種があると考えてきた。

- ① 道としての学問——人格形成・人間性涵養を目指す
- ② 方法としての学問——知性練磨・認識機能亢進・新知見獲得を目指す
- ③ 表現としての学問——学問的問いを詩や物語や演劇で表現するワザを研く

第一の「道としての学問」とは、孔子の『論語』に「十五にして学に志す」と述べられているように、学問をする人間の志や動機や実存的意味や倫理に基づく人格形成・人間性の深化・涵養・練磨を促す学問のあり方を示すものである。

第二の「方法としての学問」とは、科学や人文学を含めて、すべて学問には一定の方法論や領域があるが、そのような知に至る明晰な方法や領域の特定を通して、ものの見方の更新や概念のイノベーションや新知識の発見と獲得を目指すあり方を示すものである。

第三の「表現としての学問」とは、西洋で言えば、プラトンの対話編、アウグスティヌス『告白』、ニーチェの『ツウラトウストラかく語りき』など、日本で言えば、空海の『三教指帰』、中世の教学・教理問答テキストである法然の『選択本願念仏集』や吉田兼俱『唯一神道妙法要集』、宮沢賢治の『農民芸術概論綱要』など、問いと探究を新しい表現形式の中で探り深めていくあり方を示すものである。「学問」は、例えば「序論（問題設定）・本論（事例実験提示・論証）・結論」の過程を明確に示すような論文形式だけでなく、その思索や問題把握と問題洞察のありようそのものをさまざまな表現形式で表すことができるはずである。今日のような「査読付き学術論文」を優先順位の第一にするような偏った一元的な評価方法では学問の豊かさや創造性を発現させることはできないだろう。

以上のように、「学問」にはこの三種があり、その三種ともに重要な意味と役割とはたらきを持つと考えている。

わたしは、二〇〇八年四月に、京都造形芸術学部の教員から京都大学こころの未来研究センターの教員に転任し、教育学研究科の大学院で「臨床教育学演習」など、「臨床教育学」と名乗る科目を担当する教員となって、改めて「教育」や「教育学」や「臨床教育学」について考えるようになった。

「臨床教育学」（Clinical Pedagogy）とは、「臨床」と「教育学」の合成語である。元々医学用語である「臨床」という語からわたしがいつも連想するのは剣道の立会い試合のような緊張感と、直接相手と向き合っている対面性と、逃げ出すことのできない当事者的な

現場性である。だから「臨床」という言葉にはいつも「今、ここに実存する」という現場感覚がみなぎっていてひりひりした緊張感がただよう。

同時にそれは、一挙に開かれていく「遊び」の身体性ともつながっていて、固定観念や仕組みを破砕する「臨機応変力」を生み出す土壌ないし母胎でもある。一休禅師など、禅者の言う「頓悟」などはそのような遊動・遊戯的身体知を実現し表現しているように思える。そのような「身体知」や「臨床感覚」のありようを「臨床教育学」を通して探ってみたいと考えるようになった。

そもそも「臨」の付く熟語には、「臨海、臨死、臨戦、臨発、臨終、臨別、光臨、降臨、駕臨、哀臨、臨機応変」などがあっても、いずれものっぴきならない、逃れることのできない当事者性や代替できない「此れ性」を表わしている。「臨」という字の傍の「臣」は会意文字で、下に伏せてうつむいた目を描いた象形文字であるという。そこで、「臨」という字は「臣（伏せ目）+人+いろいろな品」という組み合わせになり、人が高いところから下方の物を見下ろすことを示すこととなって、「高いところから下を見る」とか、「面と向かう」とか、「物事や時期に当面する」とか、「他人の来ることを表す敬語」とか、「死者のところに集まって泣く・その儀式」とかの意味に用いられるようになる。

このような「臨」という意味性を持つ「臨床の知」とは、ある事態や状況に「孔を開ける知」であり、「孔の開く時（機）」である。その「場」において、その「場」の関係性の中に、風孔を開け、チャンネル（回路・水路・通路）を開き、身体を媒介として通じ合い、多次元的に対話する、開かれた身体知のいとなみ、それが「臨床の知」であり「臨地の知」である、と。

そして、「臨床」や「臨地」の「知」に欠かせない「臨機応変力」とは、「遊行性」と「即（速）性」となる。その時その場で組み立て、編集し、即座に、即応・対応する。「即身・速身、即心、即席、即位、即物、即答、即応、即決、即座、即戦、即時、三諦即一（「空・仮・中の三諦は本来ひとつである」とする天海が開いた天台教学である山王一実神道の教義）、即非、色即是空・空即是色」などなど、「即」のロゴスとパトスの「即身＝即心」の流れに身を任せて生き切る。それが「臨機応変」を生み出す「臨床教育学」の場の知であると。

だが、常に「臨機応変」の最適解を出すことは難しい。状況状況で判断と行為の選択を迫られ、その判断と行為が正しいかどうか、最適かどうかを吟味する余裕もなく流れていく事態の連続も起こり得る。そうした時に、正確で正しい「解」を立てることなど甚だ困難である。だが、一度選択し実践した「解」についてはこの身に引き受け、責任を取らねばならない。

「臨床教育学」という予期せぬ領域に足を踏み入れたために、いつそう混乱するような思考と判断と行為の渦中に投げ込まれることになった。その偶然とも必然ともいえる事態に感謝しつつも、そこからさらに深い学びと考察を導き出したい。

第三節 鳥山敏子の「臨床教育学」的実践と「靈性」的自覚

二〇一三年一〇月七日、鳥山敏子は突然この世を去った。享年七十二歳であった。亡くなるその日の朝まで、鳥山は小学三年生の子どもたちの前に立って授業をしていた。授業中に気分が悪くなって、その日の夜、急死したのだった。

鳥山敏子は、日本が戦争に突入する直前の一九四一年一〇月三日に広島県に生まれ、香川大学教育学部を卒業し、東京都青梅市で小学校の教師となり、三〇年間、東京都の公立小学校の教員を続けた。そして一九九四年に職を辞して「賢治の学校」を作り、一九九七年立川市に拠点を移し「東京賢治の学校」と改称して本格始動した。

鳥山は、東京都内の公立小学校で、ニワトリを殺して食べる授業やブタを飼育したあとで一頭丸ごと食べる「いのちの授業」を行ない、物議をかもした。その教育実践はまさに「臨床教育革命」であったと言える。

「いのち」が「いのち」であることの生のかたちを、身体的にまるごと感受することなしに「いのち」の尊厳も根源もわかるわけがない。「命を大切にしよう」などという口先だけの道徳訓では、心の底から「いのち」を畏怖・畏敬し大切にできる子どもは育たない。

鳥山はそう確信していた。口あたりのよいだけの甘い言葉などではなく、真に「いのち」を大切にできる深く優しい心と体に育っていくこと。鳥山がめざしたのはそのような「身心」であり、さらに言うなら、それを支える「たましい」の教育であった。「いのち」とはからだもこころもたましいもまるごと含む存在である。

鳥山敏子は『いのちに触れる——生と性と死の授業』（太郎次郎社、一九八五年）の中で次のように述べている。「最初、考えていた『人間と肉』の授業は、生きているものの『生と性と死を考える』授業へと変化していった。豚や牛をただ食べものとしてみるのが、わたしにはできなかった。同じ生きものとして、いやむしろ、もっとも残酷なことを平気でしている生きもの、動物として人間をとらえるようになっていた。／『生きるということ』『性』『死』を、豚も牛もヒトもおなじ線上にならべて考えてみよう。人間優位の考えが陶然という考え方のなかで、どのくらい授業でやれるかわからないが、人間のためならすべてが許されるという考えと、なんとか対決してみたい。」

鳥山は「同じ生きもの」の「いのち」の根源を見つめる授業を展開していく。「人間と肉」の授業から「生と性と死を考える」授業へと。人間優位の考えを取り外して「いのち」の平等性と尊厳に迫っていく。

『からだが変わる 授業が変わる』（晩成書房、一九八五年）では、鳥山は、「これらの授業を通して、自分を見つめ、生命を考える授業をやってきたが、これらの授業は、子どもたちを育てている父母が、日々の生活の中で、その全存在をかけて、わが子のからだに語りかけていることの中で進行している。親たちは、日々の子どもたちのからだが発することば、うめき、叫び、喜び、悲しみ、訴えなどを、その生命がのびていきがっている方向を、どれだけの深さで感じとっているのだろうか。学校の授業は、子どもたちの存在に大きな影響

を与えることもあるが、しかし、何といても親の影響力は決定的ともいえるほどの力をもつ。親が己れ自身をどうみつめ、どう生きるか、それに子どもたちの未来はかかっている、といても過言ではないだろう。」と述べている。

「その生命がのびていきたがっている方向」をどう感じとることができるか、それが鳥山にとって教育の本質的意義である。わたしは、この「生命がのびていきたがっている方向」を「いのちのコンパス」としての「靈性」として考える。

鳥山はまた『生きる力をからだで学ぶ』（トランスビュー、二〇〇一年）の中で、次のように「教師」と教育について述べている。「教師にとって、この子どもはどこから来て、どこへ行こうとしている存在なのかということ、子どもの命の核にある『伸びていきたい』という部分に教師がどれだけ働きかけることができるかが、毎日問われています。そのとき、いちばん問題になるのは教師自身のありかたです。教師がいきいきしていないと創造的な授業はできません。また、自分にこだわりすぎていたり、子どもをていねいに見ていなかったりすると、そのときどきの子どもたちのからだに沿った授業はつくれません。教えた気持ちは先走り、子どもが今この瞬間求めているものが何かということが見えなくなってしまう。そんなことでは、子どもが創造的なからだになっていくはずがありません。子どもにふれるということは、同時に子どもからもふれられるということです。教師の存在のありようすべてにもふれているということです。」

「子どもの命の核にある『伸びていきたい』という部分に教師がどれだけ働きかけることができるか」が学校教育の根幹である。そのためにも、「命の核」に触れ、はたらきかけることができなければならない。

この痛切な自覚が宮沢賢治とルドルフ・シュターナーの教育実践に向かわせ、前人未到の「東京賢治シュタイナー学校」の設立となったのだった。そこでは、小学校一年生から十二年生、つまり高校三年生までが一つの学び舎で生活を共にする。まったく新しい「心身霊の教育共同体」を鳥山は作り上げた。そのラディカルで本質的な教育実践は、日本の教育界においては異端的な教育実践とみられがちであるが、大変優れた先駆的な深い臨床教育学的実践事例として必ずや未来の教育羅針盤となるであろう。

十七年前の一九九八年十一月、わたしは鳥山敏子にそそのかされて「神道ソングライター」になった。だが、二〇一三年一〇月にわたしをけしかけた張本人の姉鳥山敏子が逝ってしまった。その年の暮れに行なわれた「鳥山敏子先生を偲ぶ会」で、わたしは鳥山との出会いと「神道ソングライター」となったいきさつを語り、遺影に向かって、「この光を導くものはこの光とともにある いつの日か輝き渡る いつか いつか いつの日か／あなたに会ってわたしは知った このいのちは旅人と 遠い星から伝えきた 歌を 歌を この歌を／導く者はいないこの今 助ける者もないこの時 いのちの声に耳を傾け 生きて 生きて 生きて いけ」とアカペラで歌い、感謝と別れの法螺貝を力いっぱい吹いた。そして二〇一四年一月七日に発売した『歌と宗教——歌うこと。そして祈ること』（ポプラ新書、ポプラ社）を鳥山敏子に捧げたことを告げ、鳥山敏子の遺志を受け継いでいくことを誓ったの

だった。

鳥山敏子の教育実践記録を見ていると、心も体も「痛くなる」。鳥山はまさにその「痛み」を当人に引き受けさせようとしている。教育の当事者とは「自分自身でしかない」ことの覚悟を痛烈な「痛み」とともに迫る。子供も大人もこの鳥山の「迫り」にたじろぐ。そしてどうにも「逃げられない」こと、この身に引き受けざるを得ないことを否応なく自覚し覚悟する時、鳥山の「迫り」は一挙に「開かれ」の場を生み出す。

わたしは常日頃、「体は嘘をつかないが、心は嘘をつく。しかし、魂は嘘をつけない。」と考え、「霊性」の軸を「嘘をつけない自分」と捉えている。どのようにごまかそうとも、ごまかしきれない自己。その「嘘をつけない自己」の開示を鳥山は求めるのだ。

鳥山敏子の教育実践はだから、いつも真剣勝負そのものである。それゆえにこそ、それは「痛い」。生きる意味を根源的に問いかける「スピリチュアル・ペイン」に満ちている。感覚・身体・言語を総動員して「開かれ」と「突破」を迫る。尋常ではない迫力で。

それでは、鳥山敏子が開いた「東京賢治シュタイナー学校」とはどのような「学校」であり、「教育」をしているところなのか？

シュタイナー教育は、ドイツの神秘哲学者ルドルフ・シュタイナー（一八六一—一九二五）の人間観や教育法に基づいている。その人間観や教育法の特徴は、成長の節目を七年単位で捉えながら、その成長過程にふさわしい教育実践を促すことにある。たとえば、七歳までの幼少期には「意志」の育成、八歳から十四歳までの少年期には「感情」の育成、十五歳から二十一歳までの青年期には「思考」の育成と、それぞれの成長課題が設けられ、その時期と課題にふさわしい教育方法によって「意志」や「感情」や「思考」を活性化させ、開かせる。

孔子は「十有五にして学に志す」と言ったが、この十五歳という境界年齢は、シュタイナーの発達課題理論にしたがえば「感情」から「思考」の育成に転換していく時期に当たる。その時期に思考力を育成する「学に志す」ことは、孔子の観点とも一致すると言えるだろう。シュタイナーは言う。「子どもの魂の中にあれこれいろいろなものを注ぎ込んではいけません。そうではなくて、子どもの精神の前に畏敬の念を持つのです。この精神は自分自身で成長していきます。私たちの責任は、子供たちの成長を妨げる障害物を取り除き、その精神が自分自身で成長していくきっかけをつくってあげることなのです。」と。

「志学」という探究が始まれば、おのずと、それぞれの発達年齢と課題に応じて、「而立」「不惑」「知命」「耳順」「従心」に至ると考えた孔子とシュタイナーは驚くほど近くにいる。孔子もシュタイナーも精神の自己成長に信を置き、それを妨げることこそがもっとも非教育的・反教育的な事態だと考えている。孔子が「五十にして天命を知る」と言う時、そこに「天」に向って「畏敬の念」を抱いて立っている「精神」がある。その「精神」が「天命」を聴き取るのだ。その「精神」を「霊性」と言い換えることもできるだろう。

さてそれでは、このシュタイナー思想と教育実践と宮沢賢治がどう関わるのだろうか？ 現在、「東京賢治シュタイナー学校」のHPには、宮沢賢治の『農民芸術概論綱要』の「序」の中の有名な一節「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」が引

かれ、「宮沢賢治は、生き物はみな兄弟であり、生き物全ての幸せを求めなければ、個人の本当の幸福はありえないと考え、生き物、鉱石、風、虹、星、といった森羅万象との交感から多くのエネルギーを体得していました。宮澤賢治の精神とは、『正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである。』（宮沢賢治 一九二六年）というものです。これは、宇宙・自然・他者とつながる『共生の精神』ということができます。この精神は、ドイツのルドルフ・シュタイナーが提唱した精神ともみごとに繋がっています。『東京賢治シュタイナー学校』でもこの思想を第一義として、自らの身体と心の内なる声を聞き、人、生き物、地球、宇宙との深いかかわりを意識することに重点をおき、その中で自分らしく生きていくことを学びのなかで実践しています。」と説明されている。

この説明の核心に照応の原理がある。世界がどのような関係構造の中にあるか、その中で自己の位置と役割とは何であるか、そこでわたしはどう生きていくのか。そのような世界認識と自己認識と社会实践との相関が示されている。宮沢賢治の『農民芸術概論綱要』の「序論」の中にある言葉「正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである。」がそのありようを示している。

「銀河系を自らの中に意識してこれに応じていくこと」が「正しく強く生きる」ことになるのは、説明の必要な表現である。なぜ、「銀河系を自らの中に意識してこれに応じていくこと」が「正しく強く生きる」ことになるのか？ 仮にこの言葉を近くにいる花巻農学校の生徒や保護者や同僚教員が聞いても、よくわからなかつたらう。たぶん、煙に巻かれたような気分で、ロマンティックな修辭的な文飾に興ざめたのではないだろうか。

だが、宮沢賢治は意気軒昂であり、真剣であった。そのような生き方こそが、賢治流の「靈性的自覚」に基づく生き方であると確信していた。宮沢賢治の世界観の中では、「銀河系」とか「四次元」とかはほとんど『法華經』ないし『法華經』の生命観や宇宙観と同義である。従って、論理的には、「正しく強く生きる」とは、「銀河系」すなわち『法華經』を「自らの中に意識してこれに応じていくこと」となり、賢治の中では明確な整合性を保持している。

宮沢賢治は大正十五年（一九二六）に羅須地人協会を設立し、その設立宣言書として『農民芸術概論綱要』を作成する。先にも引用したように、その「序論……われらはいっしょにこれから何を論ずるか……」の中で、この羅須地人協会では、「近代科学の実証と求道者たちの実験とわれらの直観の一致に於て論じ」つつ、世界全体の幸福を追求し、「世界が一の意識になり生物となる方向」に「求道」的に自我意識の宇宙進化を目指し、「銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行く」ことが謳われている。一九二六年設立当時、このマニフェストを真に理解した人がどれくらいいたのだろうか？ ほとんど皆無であったと思われる。だがもし「銀河系を自らの中に意識して」生きている宮沢賢治（一八九六―一九三三）がルドルフ・シュタイナー（一八六一―一九二五）の教育論や『アーカチャー年代記』を知ったとしたら、大いに共感した可能性はある。

鳥山敏子は、この生前に出逢うことのなかつた二人の同時代人であるルドルフ・シュタイ

ナーと宮沢賢治を「命の核」において刺し貫き、「生命がのびていきたがっている方向」をつなげたのである。その鳥山の「本能」とも「魂能」ともいえる「いのちのコンパス」にわたしは絶大なる信を置く。

第四節 坂本清治の久高島留学センターの教育実践と大重潤一郎の『久高オデッセイ』三部作

鳥山敏子の影響を受けながら、独自の学校教育に取り組んだのが坂本清治である。坂本清治は一九六〇年に神奈川県横浜に生まれた。食糧問題に関心を持ち、琉球大学農学部に進学。大学四年の時、一年間休学して、鹿児島県から山形県までの全国の農山村を見て回り、各地の研究者や行政の担当者から話を聞いたり、農家に住み込んで働いたりした。宮崎県児湯郡木城町では、武者小路実篤が開いた「新しき村」にしばらく滞在もした。一時は大学中退も考えていたが、沖縄に戻って、「帰農論——疎外の克服のために」と題する論文を書き、大学を卒業した。卒業後も、有機農業や創造的な活動をしている教育施設への関心と経験を深め、鳥山敏子の設立した「賢治の学校」に関わってゆく一方で、学習塾を営んでいたが、長年温めてきた「久高島留学センター」を二〇〇一年に設立し、代表に就任した。

この前年、久高中学校は在校生二名のみとなり、廃校の危機に陥っていた。坂本は全国から生徒を募集し、廃校寸前の久高中学校に十四名の留学生を連れてきて「久高島留学センター」を立ち上げたのである。久高中学校の存続はこの坂本清治が創設した「久高島留学センター」なしにはありえなかった。坂本はその後一時期、NPO 法人久高島振興会の副理事長も務めたが、二〇一四年三月末に久高島を去った。

「久高島留学センター」は離島型の山村留学機関である。主に中学生を受け入れ対象にしているが、少数ながら小学生も受け入れている。全国各地から久高島に留学してきた子どもたちは、センター長の坂本清治の指導の下、共同生活を営みながら島の自然に触れ、漁やカヌーやシュノーケリングなどの海の活動、畑での野菜作り、三線・笛・太鼓・歌など沖縄の伝統芸能の習得、清掃や祭りなど地域の活動に参加しながら、久高小中学校に通い、勉学に、部活動に励む。島の中で規律正しい共同生活を営みながら、伝統的な人生儀礼や通過儀礼も経験し、子どもたち個々人が直面している課題に向き合い、地域の祭祀や行事などの協働作業にも参加し、地球規模で取り組まなければならない現代世界の課題にも目を向け、それに立ち向かっていける人材の育成を模索している。

坂本清治は、「“核”と“輪郭”をつくる」と題するインタビュー記事の中で次のように述べている (<http://www.bookclubkai.jp/interview/contents/0075.html>)。

「久高島留学センターは二〇〇一年にオープンしましたが、当初はここに来る子の八五%~九〇%が不登校の経験者でした。いまは三割くらいに減っています。おっしゃるようにこの島ならではの素晴らしい環境を求めてくる子もいますが、そんな子も不登校の経験のある子も、それぞれが課題を持っていて、不登校そのものは全く問題ではないと思っ

ています。ここに来るきっかけは様々ですが、たとえ親御さんが熱心に勧めても、最終的には本人が『ここががんばります』と言わない限り、受け入れはしません。しかし、今まで不登校で悩んでいた子ども達のほとんどが、ここへ来ると見違えるように生き生きしたり、農作業をがんばって地域のおばあちゃんたちからも可愛がられるようになります。その意味では、引きこもりタイプの子は結構大丈夫ですし、面白いですね。むしろ難しいのは、非常に粗暴な振る舞いをする子や、常に友達と群れたり、みんなの注目を浴びていないと気が済まない、つまり一人であることができないような子です。」と述べている。

この「久高島留学センター」の活動を記録したのが奥野修司『不登校児 再生の島』（文藝春秋、二〇一二年）である。ここには、日本の全国各地から集まってきた中学生たちが共同生活をしながら、島の人々と交流し人間として変化し成長していく姿が描かれている。

前掲坂本のインタビューで述べられていたように、当初「久高島留学センター」にやってくる子どもたちのほとんどが不登校児であった。が、その九割以上の子どもたちが、ここで生活の中で大きく変化し成長し再生した。

久高島は「神の島」と呼ばれてきた沖縄本島西南部の小さな離島であるが、この島にはコンビニもスーパーもない。本屋もゲームセンターもない。子どもたちはテレビやゲームから距離を置き、自然と地域の中に一個の「いのち」として身を置くことになる。そしてそこで、バーチャルなゲーム的世界ではなく、身体的な痛みと喜びを伴う身体知的現実世界に生きることになる。久高島ならではの追い込み漁体験やの飛び込み（オリンピック競技の高飛び込みなどとは全く異なる）、また島の年中行事の祭祀や久高大運動会での島内三〇〇〇メートル走への参加。日常生活も食生活も劇的に変わる。ジャンクフードを食べる暇も機会もなく、魚と野菜中心の食事になる。食が変わると体形も変わる。沖縄大学元学長の加藤彰彦はこの「久高島留学センター」を「現代版若衆組」と呼んでいる。

現在の「久高島留学センター」のHPには、次のように久高島と留学センターが紹介されている。「久高島は、珊瑚礁に囲まれた美しい海と恵まれた自然環境を有し、古くから琉球の始祖アマミキヨが降臨し、五穀を初めて伝えたという「神の島」として崇拜を集め、こころのふるさととして親しまれている所です。／この独特の風土、自然に育てられた久高島に留学生を受け入れ、かつて子ども達が大人に成長する過程で課せられた体験や人生の節目節目に通過する儀式（イニシエーション）などを経験する中で、子ども達が学び成長していくことを望んでいます。／また、地域伝統文化学習や自然環境学習を島ぐるみで行うことにより、学校児童生徒の確保、コミュニティ活動の充実、地域住民の連帯意識の高揚、他地域との交流活動、観光の推進、地域の経済振興などが図られ、地域の活性化に大きく寄与することを目指しています。」

この久高島は、沖縄本島東南部に浮かぶ人口二〇〇名ほどの小さな島で、琉球王朝時代から「神の島」として東方ニラーハラー（ニライカナイ）と呼ばれる他界信仰を保持してきた。そこでは十二年に一度、午年に^{カミンチュ}神女になるための儀式「イザイホー」が行なわれてきたが、

一九七八年以降、後継者難によりその伝統も途絶えている。本年二〇一五年一月五日には旧暦午年十一月十五日のイザイホー開催の日に当たったが、伝統的なイザイホーの祭りは行なわれなかった。が、久高島の聖所である久高殿神アシャギで切実かつ痛切な祈りが捧げられたを大重潤一郎監督のドキュメンタリー映画『久高オデッセイ第三部 風章』（二〇一五年製作）は記録している。

折口信夫は、一九二三年（大正十二年）に書いた「琉球の宗教」の「二、遥拝所—おとほし」の中で次のように書いている。「琉球の神道の根本の観念は、遥拝と言ふところにある。至上人の居る楽土を遥拝する思想が、人に移り香炉に移つて、今も行はれて居る。／御嶽拝所は其出発点に於て、やはり遥拝の思想から出てゐる事が考へられる。海岸或は、島の村々では、其村から離れた海上の小島をば、神の居る処として遥拝する。最有名なのは、島尻に於ける久高島、国頭に於ける今帰仁のおとほしであるが、此類は、数へきれない程ある。私は此形が、おとほしの最古いものであらうと考へる。」と。

この「お通し」が行なわれる最高至貴の聖地が世界遺産に指定されている斎場御嶽で、その斎場御嶽のサンゴ石灰岩の断層が造形した見事な神秘空間である「三庫理」が「神の島」と呼ばれてきた久高島を「お通し」する遥拝所である。

大重潤一郎は、一九四六年に鹿児島県南端の港町の坊津に海の一族の末裔に生れた。生涯海を愛し、海のエロスに感応しながら、「海人」として享年六九歳の生をまっとうしたと言える。岩波映画で学び、一九七〇年に風変わりな劇映画『黒神』でデビュー。その独創的な作品は黒木和夫監督に「十年早い傑作」と称されたが、まったく大衆受けすることはなかった。このデビュー作『黒神』から、「大阪のチベット」と呼ばれた能勢町のミサイル基地建設の反対運動を記録した『能勢～能勢ナイキ反対住民連絡会議』（一九七二年）などを経て、『水の心』（一九九一年）、『風の島』（一九九六年）、『小川プロ訪問記』（二〇〇一年など）次々に自然と人間と文明との葛藤と調和への希求を描く記録映画を発表し続けた。

二〇一一年の東日本大震災後、その『黒神』の真価が評価され始め、自然派である大重映画の徹底した表現と訴求力が若者や未来の生き方転換を模索する人たちに拡がり始めた。大重は遺作となった「久高オデッセイ第三部 風章」まで、一貫して大自然の中で慎ましくも逞しくけなげに生き抜いていくいのちの輝きと祈りと祭りとエロスを描いてきた。「気配の魔術師」大重潤一郎の映像のエロティシズムは澄明で永遠性を感じさせるリリズムを横溢させている。「久高オデッセイ」という名称に物語るように、大重は「オデッセイ」という叙事詩を謳う吟遊詩人であり、映像の詩人であった。

その映像詩は、一九九五年の阪神大震災の経験で深められた。大阪に事務所を構えていた大重は震災後家族の住む神戸の自宅に向かって歩いた。高速道路がへし折れ、ビルも民家も倒壊し粉塵が上がり、無秩序な瓦解した黙示録的な終末世界のような光景が広がっていた。

その信じ難い廃墟の破局的な光景の中でも、アスファルトからタンポポが芽を吹き出すいのちのいなみがあつた。大重は猛然と『光りの島』（一九九五年製作）の編集に取りかかり完成させる。このアスファルトの地面の下には縄文時代から続いているいのちが埋蔵さ

れている。大重の野生の感覚はそのことを見逃さなかった。そのいのちを取り戻す！

『光りの島』は廃墟となった神戸とポジとネガの関係にあり、大重の死生観が表出されている。沖縄の無人島（新城島）の島の光と風アラグスクに晒され、見えないモノを視、聴こえない声を聴き、「いのちの帰趨」に触れて、その根源に響く「母の声」を聴く。母は死の間際に「死んだらなんにもならん」とつぶやいた。

島を訪れてきた主人公（独演：上條恒彦）はその「死んだらなんにもならん」という母の言葉を反芻し、問いかける。そして終に、次のような「いのち」観に到達する。

「母さん、そうじゃなかったでしょう。『死んだらなんにもならん。』なんて。死んでも生きています。生きる姿は変わってしまっただけ。しかし、母さんがどうしているか分かって良かった。母さんよかったね。」

大重潤一郎の遺作となった『久高オデッセイ第三部 風章』においても、自然といのちの循環が言葉ではなく映像で悠久の時間を紡ぐように示されているが、この『光りの島』の中でも同様に主人公は次のように語る。

「この島の自然に始まりも終わりもない。くりかえしがあるだけじゃないか。地球は生命のゆりかごであるという。しかしそれは生み出すだけではない。死をもひきとっている。そして眼には見えない。耳には聞こえないちがう次元へ導き、計り知れないいのちを生かしている。生も死も全てを包み込んで大きなうねりをくりかえしている。」

「全てが生きている。祖先や様々な霊たちが石の像（かたち）を借りて唄っている。」

ここには鳥山敏子が追求してきた素のままの「いのちのすがた」がある。

大重は処女作『黒神』以降、ワンパターンのように、自然といのちの偉大さとそれへの畏怖畏敬とその息吹に浸されて謙虚にかつ懸命に人々が生きていく姿を描き続けてきた。東日本大震災後、そんな大重映画が別の形で甦った。いのちといぶきといのりの覚醒の中で。

「霊的な自覚」を映像で示す作品群として。

大重は、坂本清治が「久高島留学センター」の設立準備をしていた二〇〇〇年に、『縄文』（福井県三方町縄文博物館常設展示映像）と、久高島に通い続けたカメラマンで民俗学者の比嘉康雄の遺言を記録した『原郷ニライカナイへ——比嘉康雄の魂』を製作した。続けて、二〇〇一年には『ビッグマウンテンへの道』（ナレーション：山尾三省）を製作し、これらを「古層三部作」を名付けた。その後、二〇〇一年に大重は沖縄に移住し、故比嘉康雄氏の遺志を受け継ぎながら久高島と那覇市に住み着いて『久高オデッセイ第一部 結章』の製作に取りかかった。

が、二〇〇四年十月に脳内出血で倒れ、再起不能の状態にまで追い込まれながらも、激痛に耐えつつ、半身不随の体に鞭打ち、二〇〇六年に『久高オデッセイ第一部 結章』を完成させ、さらに二〇〇九年に『久高オデッセイ第二部 生章』を、二〇一五年六月には『久高オデッセイ第三部 風章』を完成させ、同年六月二十一日に久高島で初上映会を開き、七月五日に東京両国の劇場シアターXで島外初上映会を開催した。

長篇記録映画『久高オデッセイ』三部作は、「神の島」と呼ばれてきた久高島の祭祀＝祈

りと生活＝暮らし（漁労・農耕など）を島の自然風土の中で繊細・丁寧にドキュメントするものである。この久高島を十二年間にわたって記録する『久高オデッセイ』三部作は大重映画の到達点であり集大成であり、前任未踏の「沖縄文化論」である。

『久高オデッセイ第一部 結（ルビ：ゆい）章』は、二〇〇二年から二〇〇六年まで撮影された映像を元に、二〇〇六年、国際宗教史宗教学会の学術大会において初上映された。久高島の祭祀と生活、日常（ケ）と非日常（ハレ）の両方を追いかけてながら、島の年中行事の記録とともに、特に男性漁労祭祀の中心人物であった「ソールイガナシー」と呼ばれる男性最高神役福治友行の退任を記録している点で特色がある。

続く『久高オデッセイ第二部 生（ルビ：せい）章』は、二〇〇六年から二〇〇八年まで撮影された映像を元に、二〇〇八年六月に東京大学理学部小柴ホールで行なわれた東京自由大学設立十周年記念特別行事「地球温暖化防止シンポジウム～地球温暖化一宇宙からの視点」シンポジウムで初上映された。この第二部の特色は、「ハッシャ（法者）」と呼ばれる島の男性役職が定まり（ハッシャ代行の一人は第三部の主人公的な内間豊）、「イラブー漁」と「イラブ燻製」が始まったことと、イザイホーによって「神女（カミンチュ）」となった女性神役三人の定年（七〇歳）による退任儀式「フバワク」が行なわれたことの記録である。

遺作となった『久高オデッセイ第三部 風（ルビ：ふう）章』は、二〇一二年から二〇一五年一月まで撮影された。この第三部では、島に誕生した内間豊（第二部のハッシャ代行）映子の長女内間菜保子の誕生と西銘亜希という「ファーガナシー」の魂を受け継ぐとされる若い神女（カミンチュ）の誕生が描かれている。二人の若い女性のいのちがどのように島の未来を変え、つなぐ力になるか、希望と期待と光明とともに映画は閉じられる。また、久高島を訪れた船上生活を営む谷龍一郎一家の暮らしぶり、ライフスタイルについての映像も、この『久高島オデッセイ』三部作という「海の映画」の核心を衝いている。

とりわけ第三部では、歌うような、あやすような、癒すような、せつないチェロの響きが奏でられ、荒れ狂う白馬の台風や無限を感じさせる朝日やノスタルジーと悲しみを湛えた夕日や島の子どもたちや神女たちや海人たちの日常が描かれる。その島のさまざまなるいのち。この映像が伝えているのは一貫して、「いのちのすごさ・とうとき・ゆたかさ・おもしろさ」である。台風と海亀の産卵と植物や花のシーンがそれを証している。

この作品の最後に大重は自らナレーターとなって次のように語る。

「地下水脈がわき出るような歌声であった。祭りは途絶えているが、祭りの命は息づいている。祭りは人間が生きている限り行われる。生きていることの証が祭りである。やがて、違った形で復活するだろう。十二年間待っていた島の姿を確認した。

東の海の向こうには、ニライカナイがあるとされている。しかし、この島こそが、この地球こそが楽園ニライカナイではないか。地球の七割が海である。陸地が海によって、繋がっている。海に生まれている久高島は、姿を変えながらも、脈々と命を紡いでいた。」

第三部冒頭では、坂本清治が「久高島留学センター」の子どもたちを含む久高中学校生徒を指導しながら追い込み漁をする場面が描かれている。坂本清治の貴重で未来的な教育実

践は、『久高オデッセイ』三部作の中にしかと刻み込まれている。

『久高オデッセイ第一部 結章』の中に海亀が出てくる。その海亀はイノー（礁地）の中で海に戻れずどうしていいかわからず戸惑っているように見えた。そして遺作『久高オデッセイ第三部 風章』の最後に出てくる海亀は涙を流しながら産卵を終え、後ろ足で盛砂を固め、わが子である卵を保護して堂々と久高島の東の浜を後にした。

大重潤一郎はこの海亀のように『久高オデッセイ』三部作を産卵し、堂々と彼の好きな海に還っていった。鳥山敏子の教育実践や著作がそうであったように、大重の魂は、この映画の中に、彼の映画人生の全作品の中に一つ一つの卵＝魂子として生き続け、後続する者に新鮮ないのちの水と風と空気を惜しげもなく絶やすことなく与え続けているのである。

第五節 東京自由大学の教育実践

大重潤一郎は二〇〇二年に設立した NPO 法人沖縄映像文化研究所の理事長であったが、同時にわたしが理事長を務める NPO 法人東京自由大学の副理事長も務めた。わたしは宮沢賢治とルドルフ・シュタイナーと大本の出口王仁三郎を先達モデルの指標として、一九九八年に「東京自由大学」を設立した。

一九九八年、わたしは大重潤一郎とともに阪神大震災後の鎮魂イベント「神戸からの祈り」に取り組んでいた⁽¹⁾。ちょうどその渦中の五月から同時並行してわたしたちは「東京自由大学」の設立準備を始めたのである。映画監督の大重潤一郎のほか、ギャラリーいそがやの代表の長尾喜和子、画家の横尾龍彦、香禅気香道の福澤喜子、早稲田大学教授の池田雅之、西荻 WENZ スタジオ代表の平方成治、わたしの七人で設立についての話し合いの機会を持ち、設立趣旨、理念、姿勢、方向性、方法、組織、運営などについて意見交換し、そこでの合意をもとに、横尾龍彦を学長に推挙し、新たに作家の宮内勝典、山形大学教授の原田憲一、陶芸家の川村紗智子の十人を設立発起人とし、さらに賛同者二十二名と意見交換会を持ち、NPO 法にのっとり非営利組織として活動していくことを確認し、新しい市民運動としての学校づくりをみんなが参加して行っていこうと話し合った。これらの話し合いを持つ前の一九九八年十一月二十五日にわたしは「東京自由大学設立趣旨」を次のように書いた。

<二十一世紀の最大の課題は、いかにして一人一人の個人が深く豊かな知性と感性と愛をもつ心身を自己形成していくかにある。教育がその機能を果たすべきであるが、さまざまな縛りと問題と限界を抱えている既存の学校教育の中ではその課題達成はきわめて困難である。

そこで私たちは、私たち自身を、みずから自由で豊かで深い知性と感性と愛をもつ心身に自己形成してゆくための機会を創りたいと思う。まったく任意の、自由な探求と創造の喜びに満ちた「自由大学」をその機会と場として提供したいと思う。

私たちは、特定の宗教に立脚するものではないが、しかし、宗教本来の精神と役割は大変

重要であると考えている。それは、それぞれの歴史的伝統と探求と経験から汲み上げてきた叡知にもとづいて、人間相互の友愛と幸福と世界平和の希求と現実に寄与するものと考えられるからである。私たちはそれぞれの宗教・宗派を超えた、「超宗教」の立場で宗教的伝統とその使命を大切にしたいと願う。そして、人格の根幹をなす霊性の探求と、どこまでも真なるものを究めずにはいない知性と、繊細さや微妙さを鋭く感知する想像力や感性とのより高次の総合とバランスを実現したいと願う。

そのためにも、何よりも自由な探求と表現の場が必要である。自由な探求と表現にもとづく交流の場が必要である。

そして、その探求と表現と交流を支えていくための友愛が必要である。探求する者同士の友愛の共同体が必要である。私たちが生活を営んでいるこの大都市・東京のただ中に、魂のオアシスとしての友愛の共同体が必要なのである。

かくして私たちは、この時代を生きる自由な魂の純粋な欲求として「東京自由大学」の設立をここに発願するものである。

「東京自由大学」では、「教育とは本質的に自己教育であり、自己教育は存在への畏怖・畏敬から始まる。教師とは、経験を積んだ自己教育者であり、それぞれを深い自己教育に導いてくれる先達である」という認識から出発する。そして、(1) ゼロから始まる、いつもゼロに立ち返る、(2) 創造の根源に立ち向かう、(3) 系統立った方法論に依拠しない、いつも臨機応変の方法論なき方法で立ち向かう、をモットーに、勇気をもって前進していきたい。組織形態、運動体としては NPO（非営利組織）法下のボランティア・スクール法人として運営および活動をしていきたいと準備している。

また地震など、災害・事件時のボランティア的な互助組織として機能できるように行動したい。自由・友愛・信頼・連帯・互助を旗印に進んでいきたい。みなさんのご参加を心待ちにしています。 一九九八年十一月二十五日 鎌田東二>

こうして、設立以来、十八年の活動を、荻窪、西早稲田、神田と場所を変えながら、継続してきた。現在は、学長を海野和三郎（東京大学名誉教授、天文学者、九十一歳）、理事長を鎌田東二（京都大学こころの未来研究センター教授・宗教哲学・民俗学、六十四歳）が務め、二十名ほどの運営委員が中心となり運営している。

この東京自由大学のカリキュラムについては、わたしたちは設立当初、五つの柱を立てた。①日本を知るコース：わたしたちはどこからきたか？歴史の認識、②社会を知るコース：わたしたちはどうしているか？世界の洞察、③宇宙を知るコース：わたしたちはどこにいるのか？自然の叡知、④芸術・創造コース：わたしたちはなにができるか？創造の秘密、⑤身体の探求コース：わたしたちはなぜうごくのか？身体の見。

この五つのコースは、その後、①人類の知の遺産、②21世紀世界地図、③アートシーン21、④震災解説事典、⑤現代霊性学講座、⑥ボディワーク、⑦三省祭り、⑧大重潤一郎監督上映会、⑨島菌進ゼミ、⑩自由ゼミ、⑪世直し講座などとして継承展開されている。これま

でNPO 法人東京自由大学で行なった講座などの一端は、『著名人が語る〈知の最前線〉』全八巻、中沢新一、姜尚中、木田元他、リブリオ出版、二〇〇七年)、井上ウィマラ・藤田一照・西川隆範・鎌田東二『宗教は世界を救うか』(地湧社、二〇一二年)、鎌田東二『古事記ワンダーランド』(角川選書、角川学芸出版、二〇一二年)などとして刊行されている。

東京自由大学は、地震や災害やさまざまな事件など起こったときに、お互いに見も知らない者同士でも助け合い、支えあっていくことのできるような互助組織でありたいと願って設立された。人があらゆる垣根を取り払って互いに助け合い、支えあっていけることを阪神淡路大震災がわたしたちに教えてくれたことが設立基盤となっている。このような方向性で、東日本大震災後の東北被災地を巡り、地元の方々と交流したり、日本全国のみならず、海外の地域の方々とも交流していくような合宿を実施している。

この時代にそれぞれ一人一人が内なる創造力を発揮することができたならば、人間も社会も深化と成熟を遂げることができると信じ、夢を現実に実現していく共同の作業場として活動を継続し、二十代、三十代、四十代の次の世代にバトンタッチしていく準備をしている。

東京自由大学は、それぞれが一隻の船に乗って、知と天然の大海に航海していくような、塾でもあり、大学でもあり、結社でもあるような、冒険的な移動漂流教室を共に創造していくことを目指してきた。そしてその探究がこの時代の志を同じくする人たちとの友愛の共同体を力強くかたちづくっていくことを願いつつ活動してきた。

友愛を共同化していくためには、世代間の連携が必須になる。設立発起人十名のうち、七十歳台が二人、六十歳台が一人、五十歳台が五人、四十歳台が一人、三十歳台が一人、と時代的ばらつきがあった。まさしく老若男女の共同作業を行なってきたといえる。これからも宮沢賢治やルドルフ・シュタイナーや出口王仁三郎や鳥山敏子や坂本清治や大重潤一郎たちの実践に呼応しながら、自分自身と自分の属する社会を自分たちの手で成熟進化させていきたいと念じている。

東京自由大学は、地震や災害やさまざまな事件など起こった時などに、お互いに見も知らない者同士でも助け合い、支え合っていくことのできる互助組織でありたいと願ってきた。人があらゆる垣根を取り払って互いに助け合い、支えあっていけることを阪神淡路大震災は教えてくれた。わたし自身は、この時代にそれぞれ一人一人が内なる霊性的自覚を深めその「いのちのコンパス」を発現することができたなら、人間も社会も大いなる成熟と進化をとげることができると信じている。東京自由大学は、そのようなわたしたちの夢を現実に実現していく共同の作業場であった。

大重潤一郎はこの東京自由大学の活動を伴走しながら『久高オデッセイ』三部作を完成した。二〇〇四年に脳内出血で倒れ、肝臓癌を十七回もの手術をしながら、文字通り命懸けでいのちを削って完成させたのがこの三部作である。大重のNO 法人沖縄映像文化研究所(現在は任意団体)の活動とNPO 法人東京自由大学の活動は兄弟姉妹の深く親密な間柄で、互いに切磋琢磨し協力し合いながら一歩一歩進んできた。その意味で、大重の映画『久高オデッ

セイ』三部作は、「沖縄自由大学」ともいえる「沖縄映像文化研究所」のオオシゲ・スクール、オオシゲ・コミュニティ、オオシゲ・ファミリー、大重組の特産品でありながら、東京自由大学の精神性・霊性の具体的な発露でもあったと総括できる。

その大重の真骨頂は、何よりも、空気の描写であり、風の描写である。海の描写であり、花の、植物の描写である。大重映画の中ではいつも主人公は自然である。その自然の中に慎ましくけなげに、しかし逞しく生きている人間がいる。それこそが「いのち」である。大重は、処女作以来、一貫して自然への畏怖・畏敬といのちの豊かさとかげがえのなさを訴えてきた。道徳的なメッセージとしてではなく、自然との感応道交ムービー、モノのあはれとして。

そして、大重潤一郎の死去に続いて、二〇一五年八月三十一日に NPO 法人東京自由大学前運営委員長で「久高オデッセイ第三部 風章」事務局長の岡野恵美子が七十二歳で急死し、十一月二十三日に初代学長横尾龍彦画伯が癌のため八十七歳でこの世を去った。

横尾龍彦は一九二八年、福岡県に生まれた。母は神仏習合系の霊能力者だった。その母が「これからは芸術だ」と言ったこともあって、横尾は、戦後、東京芸術大学日本画科に入学した。が、実存哲学に魅せられ、ニヒリズムやデカダンを気取り、道を失った。

しかし、その後、東京芸術大学を卒業して、キリスト教プロテスタント系の神学校に入ったが、2年で退学。北九州市戸畑区の明治学園の美術教師となるも、このままでは画家として一生出られないと決意して上京した。

一九七五年には、高橋巖の主宰するルドルフ・シュタイナー研究会のセミナーに参加し、その後一九七八年からは鎌倉三雲禅堂の山田耕雲老師に師事し熱心に接心。独参を続け、見性した。そして一九八五年にケルン郊外に移住し、やがてベルリンに拠点を移してベルリンと秩父にアトリエを設け東西を往来することになる。

横尾龍彦は、NPO 法人東京自由大学のウェブマガジン「EFG 第 2 号」に次のように記している。

「神は無であるとマイスター・エックハルトは言っています。無は肉眼や意識では捉える事の出来ない叡智とエネルギーのことで神仏の世界は一つです。／神は言表不能な根源的存在で、私の無意識深く私の自我の中心に存在します。座禅によって無を極めれば私達は宇宙の根源に触れて開眼します。それが悟り体験です。」

「人間的努力だけでこの自己を超越できません。エックハルトが言う『己を失えば失う程に神がそこに来て充たす』と道元の『仏道を習うというは自己を習うなり、自己を習うと云うは、自己を忘るるなり』に自己を超えていく秘密があります。」

「私は生涯美を求めて彷徨いながら神に出会いました。／人格の完成を求めても、内なる人が聖霊に満たされて変容しなければ道徳と偽善性に縛られて自由を失います。理想の人間像は柔らかく砕けた自由人です。／その自由は目に見えない存在との交流によって齎されるのです。／人の思惑や、社会のために生きるのではなく、内面の声に従うのです。他人

からは見えませんし、人からは理解されませんが、神様に知られているのです。人を対象にすると誤解されたり、無視されて傷つくことも多いのですが、霊としての偉大な愛である存在と対話していると、孤独ではありません、そこでは静かな平和が心の中から絶えず湧出してきます。／人生は短いです。人に知られなくとも本来の真人を実現したいものです。」

「その時自己の本質が私と一つになる深い体験がありました。それは言語では説明できない全身全霊の納得でした。只、涙、涙、深い安堵感と凡てを放棄した限りない自由がそこにはありました。その様な精神状況は1週間程続きました。本来の自己の実現です。／これらの体験はすべて独参室で(山田耕雲) 老師に報告されましたが見性が許されたのは1年後の事でした。」

わたしが横尾龍彦と初めて会ったのは、一九八三年頃だった。三〇年以上前のことだ。横浜の高島屋で個展をしているのを見に行った。そして個展会場に入った途端、目に飛び込んできた絵があった。わたしはその瞬間、「この絵と縁がある！」と思った。その絵がいいか、悪いか、好きか、嫌いか、ではない。ただただ、「縁がある」と思ったのだ。

そして、わたしは生まれて初めて絵を買った。「枯木龍吟」という絵だった。初めて絵を買うなどしたわたしを慮って、横尾が絵を割引してくれ、そして自ら届けてくれた。それを横尾がわが家のマンションの壁面に賭け終わった途端、三歳になるかならないかの息子が、突然、「とうちゃん、こんな絵を買ったら、ウチがビンボーになるよ！」と言った。これにはみな仰天した。恐縮至極の息子の発言に、横尾先生は笑いながら、「そうかもしれんねえ〜」と余裕綽綽であった。苦笑いをしていたが、わたしは幸せだった。「ビンボー」ではなく、間違いなく、わが家に「たましい」が入り、「こころゆたか」になったから。具合の悪い時、わたしはその「枯木龍吟」の絵の下で眠って、元氣を得た。

わたしが横尾について書いた文章が二つある。一つは、『翁童のコスモロジー——翁童論Ⅳ』新曜社、二〇〇〇年に収めた「風と珠(たま)の人・横尾龍彦」。もう一つは、『神道のスピリチュアリティ』(作品社、二〇〇六年)に収めた「宇宙的協奏としての横尾龍彦の瞑想絵画」である。前者のエッセイでわたしは横尾を、その前半生は球を、後半生は風を主題にして描き続けた「霊性の画家」と位置づけ、彼が生涯に得た三度の神秘体験について詳述した。十代の少年の頃のある夜、部屋の中に白金色に光り輝く「球」の出現を見た「光体出現」の神秘体験と、二十五歳の時に訪れた「天地合体」の神秘体験と、五十代に禅の瞑想中に得た「光体成仏(光体消滅)」の神秘体験の三度である。このエッセイの初出は横尾龍彦の画集『横尾龍彦 一九八〇—一九九八』(春秋社、一九九八年)だった。横尾龍彦は、「シュールリアリストックでデモーニッシュ(デモーニック)な幻想画家から、禅の見性体験を経て、(自我で書く絵を捨てて)『風が描く・水が描く』画家になった。わたしは、ドイツ・ベルリンでの展覧会、例えば、ルードヴィヒ・ランゲのギャラリーでの個展や、シャーロットンブルグ宮殿での個展や、ベルリンのソニーセンターでの個展や、スロバキアの首都ブラチスラヴァやタイや北九州市鶴美術館手の個展での絵画パフォーマンスで、横尾の

瞑想描画パフォーマンスを楽の演奏（石笛・横笛・法螺貝など）で支えたことがある。

横尾龍彦の訃報を聞いて、わたしは「美と靈性の行者」横尾龍彦画伯に捧げる三首の歌を作った。

君ははや 天上巡る 龍となり 日の本宇宙の 魂描き逝く
美の行者 横の尾の上人 龍彦と 受肉せし身を 脱ぎて還らむ
はろばると 伯林秩父を 翔け巡り 天空上人 龍の眼の人

横尾は子どもの頃、毎朝神前の水を取り替え、供え物をし、朝拝の準備を整え、母とともに礼拝するのを日課とした。少年の頃のある夜、横尾は部屋の中に白金色に光り輝く球の出現を目撃する。この龍彦少年の「玉」の透視こそ、「靈性の画家」横尾龍彦の生涯を貫く創造の原点であった。先に述べたように、この少年期の光体出現と二十五歳の時の天地合体体験と五十代の禅見性体験による光体消滅の三つの神秘体験が、横尾の生涯の画期をなす体験であった。横尾の画業は、二十代からの神秘的な球体・光体を描き続けた時期と、五十代の見性体験によってそれが消えてただただ風やプネウマ的靈気の流動をのみ描く時期の二期に大きく分けられる。

瞑想画家として横尾が繰り返し言ったのは、私が描くのではない、「水が描く、風が描く、土が描く」ということであった。その横尾の画法は、「龍彦」という名の通り、「龍画」そのものだ。龍が風に乗って空を翔け、また水の中を自在に潜り巡る、波動の流れと一体となる「流画」。氣息やヴァイブレーションの流動に身をゆだね、分子の波動が微細に変化し変容していくことを映し出す、氣配と靈性の錬金術師・横尾龍彦。

その画法には、聖靈やプネウマの風が吹き渡っています。高次元界からの魂風が。それは、神秘不可思議なそよぎでもあり、同時に、大変明晰な合理と直観が一如となった流動でもあります。目に見えない世界からの風のメッセージ。

靈性の画家・横尾龍彦は「風と球の画家」であった。横尾の画業の前半生は球を、そして後半生は風を主題に自在に表現し生きた。NPO 法人東京自由大学はその横尾の「創造的靈性」を受肉している。

かつて孔子は、「七十にして心の欲する所に従へども矩（ルビ：のり）を踰（ルビ：こ）えず」と自分の辿って来た道を振り返った。七十二歳であちらに渡った鳥山敏子や岡野恵美子や六十九歳で海の向こうに旅立った大重潤一郎や八十七歳で天に召された横尾龍彦はどうであったか？ 「世直し」と「教育」と「靈性」の問題を考える時、常にわが身の軌跡と実践事例ともにしかそれを捉えることができない。そののっぴきならない「当事者」性こそが「臨床教育学」的な「靈性的自覚」にほかならないのである。

注（１）現地講師として坂本清治や大重潤一郎の力を借りながら、久高島をフィールドとして行なったわ

たし自身の教育実践として、次の三つがある。一つは、京都造形芸術大学通信教育部の授業「環境文化論」を二泊三日で二〇〇四年から二〇〇七年まで四年間行なったこと。二つ目は、二〇一二年から二〇一五年まで四年間、京都大学のポケゼミ「沖縄・久高島研究」の授業の最後の仕上げとして、四泊五日で「久高島大運動会」の参加を前提として久高島合宿を行なったこと。後者は、東日本大震災が起って、文明や社会のあり方、そこでの人間の生き方や学問的探究のあり方などを深く問いかけ、再構築していく必要があると感じていたところからの突破口として始まった。わたしは京都大学の中でも非常に小規模なところの未来研究センターという研究機関に勤めていて、教育学研究科の大学院での「臨床教育学演習」などの授業はあり、大学院生と議論する場はあったものの、学部生、とりわけ一回生と接する機会は分担授業「このころの科学入門」「宇宙総合学」など以外にはほとんどなかった。そこで、フレッシュパーソンにぜひ「沖縄・久高島」の存在を通して、民俗学や宗教学や地域研究などフィールドワーク系の研究の面白さや醍醐味を経験してもらいたいと、ポケゼミ「沖縄・久高島研究」を始めた。最初から「沖縄・久高島研究」と地域限定しているので、それなりの意識と関心を持つ学生が集まり、一班三～四名の編成にして、途中で二度のミニフィールドワーク体験（五月の葵祭と七月の祇園祭）や、フィールドワーク報告会（祇園祭フィールドワーク報告会）をするので、学生相互に交流も生まれた。一回生の時期にこのような少人数ゼミで親しく交わる経験を持つことは、「志学」の年齢を三年ほど過ぎた一八歳前後の若者の人間的・人格的「開かれ」には必要な回路であると思っている。三つ目は、NPO 法人東京自由大学の夏合宿で、二〇〇三年と本年二〇一五年に沖縄・久高島夏合宿を行なったことである。

(2) 一九九五年、阪神大震災が起こった時、大重潤一郎の住まいは兵庫県神戸市中央区北野にあった。この阪神大震災と一九九七年に起きた神戸での連続児童殺傷事件が引き金となって、一九九八年の「神戸からの祈り」の鎮魂イベントにつながっている。本年、二〇一五年は、一月十七日に起きた阪神大震災からも、三月二十日に起きた地下鉄サリン事件（オウム真理教事件）から二十年、終戦（敗戦）から七十年という大きな節目の年である。一九九五年、二つの大きな出来事や事件の後、わたしはそれに対するリスボンズとして『宗教と霊性』（角川選書）を上梓した。その二年後の一九九七年六月末に、「酒鬼薔薇聖斗」を名乗る少年 A が連続児童殺傷事件の容疑者として逮捕された。地下鉄サリン事件・オウム真理教事件から二年余が過ぎていた。この「酒鬼薔薇事件」を教育学者の竹内常一同様、わたしは「子どもの中のオウム事件」と捉え、オウム真理教事件と酒鬼薔薇事件を結びつけながら考察した『呪殺・魔境論』（集英社、二〇〇四年、二〇一三年に『呪い』を解く』と改題して文春文庫より再版）を七年かけて世に問うた。そしてさらに深くこの問題に向き合わねばならないと思う気持ちから、科学研究費補助金を申請し、二〇一一年度から二〇一四年度までの四年間、「身心変容技法の比較宗教学—心と体とモノをつなぐワザの総合的研究」（基盤 A）を申請し、研究活動を推進し、その成果を、「身心変容技法研究会」の HP : <http://waza-sophia.la.coocan.jp/> や研究年報『身心変容技法研究』第一号～第四号（二〇一二年三月より二〇一五年三月まで、毎年三月末に刊行。通算四号）として社会発信している。そして、本年四月から新採択された科研「身心変容技法と霊的暴力—宗教経験における負の感情の浄化のワザに関する総合的研究」（基盤研究 A）をさらに四年間推進していく中で、オウム真理教事件と酒鬼薔薇事件の問題、言い換えると宗教的修行と教育の問題、ひいてはスピリチュアリティと教育の関係をさらに深く学術的に究明していきたい。